「賀川豊彦献身100年」をふりかえって

加山久夫

21歳の賀川豊彦が神戸のスラムに飛び込み、社会活動を始めてから100年の節目となる2009年、「賀川豊彦献身100年」として、東京、神戸、徳島ほかでさまざまの記念事業が行われた。大正から昭和にかけて、セツルメント活動、労働運動、農民組合運動、普選運動、無産政党樹立運動、協同組合運動、平和運動など、わが国の社会運動の大半に先駆的に関わった賀川豊彦は、また、大正時代最大のベストセラーとなった自伝小説『死線を越えて』の著者として、国内外でもっとも著名な人物の一人となったが、死去した1960年以後、すっかり忘れられた人となってしまった。

1960年は「安保の年」として記憶されているが、この年はまた岸内閣退陣後に池田勇人が「所得倍増論」を掲げて登場した年であり、その後の日本は今日の中国のようにひたすら高度経済成長を至上（市場？）命題として、ほとんどの国民もそれを自らの価値としてひたすら経済的豊かさを目指し懸命に努力した。賀川豊彦などお呼びでなく、そこには彼の居場所は無かったと言ってよい。

しかし、ここ数年、特に一昨年秋のリーマンショック以来、貧困問題が顕在化し、金融資本主義社会の構造的問題が露呈、改めて公平で公正な富の分配や人間の生存権が喫緊の課題となってきた。こうして2,3年前には顧慮されることのなかった賀川豊彦に注目する人々が次第に増えてきたようだ。とりわけ、わが国「生協の父」「共済の父」と呼ばれる賀川豊彦の協同組合主義が新たに注目されるところとなった。今日では、日本生活協同組合連合会だけで2500万人の組合員を擁しており、全労済、JA 共済などを含めると、その事業規模は巨大なものである。これらの事業体がその本質において運動体であることを再確認し、「一人は万人のために、万人は一人のために」という自立と共助の基本理念を絶えず確認しなければならないことを関係者はより強く自覚しはじめたように思う。数種の雑誌が賀川特集を組み、地方新聞を含めると、2009年中に少なくとも20回以上にわたり賀川を取り上げ、彼の現代的意義について書いてくれた。賀川に関連する著作および賀川自身の著作の復刻版は10冊を数える。

賀川は明治学院神学部予科の学生当時、マルクスの『資本論』（英訳）を精読し、マルクスの資本主義批判の説得性を認め、これに共感するとともに、他方、そこには人間の精神的価値への正しい認識が欠如していることを指摘した。そして、社会主義経済でもなく、資本主義経済でもなく、人間のための経済（「人格経済」「道徳経済」）こそが重要であると語った。その行き着いたところが協同組合主義という、いわば「第三の道」であった。今日、各種のNPO、ソーシャルビジネス、ワーカースコレクティヴなど草の根の市民活動が広がってきているが、この時代の潮流のなかで賀川豊彦の理念や実践や志から学びうるものは少なくないと思う。

賀川には大小200冊以上の著作があり、その分野も驚くほど多岐にわたる。だが、率直に言って、そのいずれにおいても、専門家ではない。かといって、好事家の素人学問でもない。賀川豊彦はいわば「大いなる素人」であった。もし彼が一つの道を究める研究者であろうとしたなら、その道の優れた学者になっていたにちがいない。しかし、誠実な学者であろうとすれば、他の諸分野に関わることには禁欲的でなければならない。その意味で賀川は専門家でなかったゆえに、多面的に関心をもち、総合的な見地から社会を構想し、底辺に生きる人間の解放や人々が助け合う共益社会の実現を統合的に提唱しえたのではないか。賀川の協同組合思想は協同組合精神に基づく世界平和の実現を視野に入れた気宇壮大なものである。偶々、最近、国連は2012年を「協同組合年」とすることを決議した。そこでも賀川豊彦は再評価されることになるかもしれない。国際的にも貧富の格差がますま

す拡大化・深刻化しつつかる時代に、「賀川豊彦献身100年」から「国連協同組合年」へと発展的に繋がってゆくとすれば、はなはだ意義深いことである。（賀川豊彦記念松沢資料館館長）

かやま・ひさお（名誉所員・本学名誉教授）